

大阪方言における動詞チガウに由来する諸形式の用法

著者	高木 千恵
雑誌名	國文學
巻	92
ページ	A83-A96
発行年	2008-03-01
URL	http://hdl.handle.net/10112/1189

大阪方言における動詞チガウに由来する 諸形式の用法

高木千恵

1. はじめに

大阪方言では、チガウ、およびその縮約形であるチャウが否定形や否定疑問形としても用いられている。次の例文(1)は語彙としてのチガウ・チャウ、(2)は否定形式としてのチガウ・チャウ、(3)は否定疑問形式の中のチガウ・チャウである。

(1) いちごは、他の果物とは {チガウ/チャウ}。 [語彙]

(2) 本当は、いちごは果物 {(ト)チガウ/(ト)チャウ}。 [否定形]

(3) いちごは果物 {(ト)チガウ(カ)/(ト)チャウ(カ)} ? [否定疑問形]

(2) や (3) については、鎬木 (1995)、郡 (1997) にも指摘があるが、それぞれの形態的特徴や用法について記述したものは多くない。本稿ではチガウとそのバリエーションを取り上げ、新しい形式にも目を配りつつ、形態的特徴と文法的意味を整理していきたい。その中で確認したいのは次の3点である。

(a) 本来は動詞型の活用をするチガウに、形容詞型の活用がある。縮約形であるチャウは、基本的に形容詞型の活用をし、丁寧形(チャイマス)のほかには動詞型の活用を持たない

(b) 語彙としてのチガウ > 〈否定〉としての(ト)チガウ > 否定疑問形式の(ト)チガウ(カ) > 〈推測〉のン(ト)チガウ(カ) > 〈推測提示〉のンチャンの順に活用形が減少し、形式の固定化がすすむ

(c) 〈推測〉の用法のうち、聞き手からの情報提供を要求しない表現に特化したモダリティ形式としてンチャンという形が成立している

以下、本稿で扱う形式を § 2 で概観し、語彙としてのチガウについて § 3 で、否定形式としての(ト)チガウについて § 4 で、否定疑問形式に用いられる(ト)チガウ(カ)について § 5 で、〈推測〉というモダリティ形式としてのン(ト)チガウ(カ)について § 6 で取り上げる。さらに、ン(ト)チガウ(カ)から派生したンチャンという

新しい形式について § 7 で考察し、§ 8 では各用法のチガウの語形変化について概括する。なお、例文は議論の対象となる部分のみを方言形とし、カタカナで示す。文の適格性判断は大阪方言話者である筆者の内省によった。

2. 動詞チガウに由来する諸形式

本節では、動詞チガウとそれに由来する諸形式の形態的特徴を簡単に述べ、本稿での表記についてまとめておく。前節でみたように、チガウ・チャウは①語彙（動詞）としてのもの、②否定形式としてのもの、③否定疑問形式としてのもの、に大別される。

(4) イモリとヤモリは {チガウ／チャウ}。 [①語彙]

(5) イモリは {爬虫類(ト)チガウ／爬虫類(ト)チャウ}。 [②否定形]

(6) イモリは {両生類(ト)チガウ(カ)／両生類(ト)チャウ(カ)} ?

[③否定疑問形]

以下では、語彙としてのチガウ・チャウに対して、否定形を(ト)チガウ・(ト)チャウ、否定疑問形を(ト)チガウ(カ)・(ト)チャウ(カ)と表記することとする。

ところで、否定疑問形式の中にはン(ノ・ノン)を伴うことでイ形容詞や動詞につくものがある。

(7) イモリはもっと {小さいン(ト)チガウ(カ)／小さいン(ト)チャウ(カ)} ?

[イ形容詞]

(8) イモリは {泳げるン(ト)チガウ(カ)／泳げるン(ト)チャウ(カ)} ? [動詞]

名詞やナ形容詞の場合は義務的ではないが、～ナン(ト)チガウ(カ)・～ナン(ト)チャウ(カ)という形になることがある。

(9) イモリは {両生類ナン(ト)チガウ(カ)／両生類ナン(ト)チャウ(カ)} ?

[名詞]

(10) イモリの方が {小柄ナン(ト)チガウ(カ)／小柄ナン(ト)チャウ(カ)} ?

[ナ形容詞]

後述するように、これらは否定疑問形式の(ト)チガウ(カ)・(ト)チャウ(カ)とは異なる固有の文法的意味を担っているため、本稿ではン(ト)チガウ(カ)・ン(ト)チャウ(カ)と表記しておく。

ほかに、若年層の間でよく使用されているものとして、ン(ト)チャウ(カ)のバリエーションの一つであるンチャウに助詞ンが後接し、さらに縮約したンチャンとい

う形がある。

(11)イモリはもっと小さいンチャン。(= (7))

(12)イモリは泳げるンチャン。(= (8))

(13)イモリも爬虫類(ナン)チャン。(= (9))

(14)イモリの方が小柄(ナン)チャン。(= (10))

(12)のように「～る」で終わる動詞にンチャンがつく場合には、動詞の撥音便化(オヨゲル→オヨゲン)とンの縮約が起こって「オヨゲンチャン」のようになることも多い。ンチャンとン(ト)チガウ(カ)・ン(ト)チャウ(カ)の用法には重なりもあるが、つねに交替可能な自由変異というわけではない(§7参照)。

以上が本稿で扱うチガウに由来する諸形式である。本稿におけるそれぞれの表記について表1にまとめておく。

〔表1 チガウのバリエーション〕

語彙(動詞)	否定形	否定疑問形1	否定疑問形2	否定疑問形3
チガウ	(ト)チガウ	(ト)チガウ(カ)	ン(ト)チガウ(カ)	—
チャウ	(ト)チャウ	(ト)チャウ(カ)	ン(ト)チャウ(カ)	ンチャン

表1の「否定疑問形」の中には実際には「否定」や「疑問」の意味を失っているものもあるが、ここでは便宜的に「否定疑問形1」「否定疑問形2」「否定疑問形3」としてある。各形式の用法については§5～§7を参照されたい。

なお以下では、煩雑さを避けるため、チガウおよび縮約形チャウに共通することからについて述べる場合には例文等はチガウで代表させ、チガウ・チャウの相違点を問題にする場合には個別に表記することとする。

3. 語彙としてのチガウ

まず、語彙としてのチガウについて考えてみたい。チガウにはチャウという縮約形があるが、意味的には同一である。

(15)イモリとヤモリは {チガウ/チャウ}。

両者は活用のしかたに違いがある。丁寧形を除くと、チガウが動詞型活用と形容詞型活用の両方を持っているのに対して、チャウは動詞型活用を持たず、形容詞的に活用する。具体的には表2のようである。

[表2 チガウ・チャウの語形変化]

	①チガウ		②チャウ	
	a. 動詞型	b. 形容詞型	a. 動詞型	b. 形容詞型
I 丁寧形	チガイマス	—	チャイマス	—
II タ形 (過去形)	チガッタ チゴータ チゴタ	チガウカッタ	—	チャウカッタ
III テ形 (中止形)	チガッテ チゴータ チゴテ	チガウカッテ チガウクテ	—	チャウカッテ チャウクテ
IV 否定形	チガワン チガワヘン	チガウコトナイ チガウクナイ	—	チャウコトナイ チャウクナイ

表2に示したように、チガウ・チャウともに丁寧形としては動詞型のチガイマス・チャイマスしか持っていない。タ形・テ形・否定形については、チガウには動詞型と形容詞型の両形があるが、チャウには形容詞型の形式しかない。ちなみに、形容詞型のテ形にある～カッテという形は、過去の事態について言及するときに使われる、大阪方言のイ形容詞に特徴的な形態の一つである(高木2000)。同じく形容詞型否定形の～コトナイも、大阪方言に特徴的な形容詞の否定形式であり、どちらも形容詞型活用として表中に挙げている。以下、それぞれの具体例を記す。

I. 丁寧形

(16) イモリとヤモリは {チガイマス/チャイマス}。 [動詞型]

II. タ形 (過去形)

(17) a. お母さんかと思ったら {チガッタ/チゴータ/チゴタ}。 [動詞型]

b. お母さんかと思ったら {チガウカッタ/チャウカッタ}。 [形容詞型]

III. テ形 (中止形)

(18) a. この間と話が {チガッテ/チゴータ/チゴテ} 混乱した。 [動詞型]

b. この間と話が {チガウカッテ/チャウカッテ} 混乱した。 [形容詞型]

c. この間と話が {チガウクテ/チャウクテ} 混乱した。 [形容詞型]

IV. 否定形

(19) A : それじゃこの間と話が違う。

B 1 : え?別に チガワン / チガウヘン と思うけど? [動詞型]

B 2 : え?別に チガウコトナイ / チャウコトナイ と思うけど?

[形容詞型: ~コトナイ]

B 3 : え?別に チガウクナイ / チャウクナイ と思うけど?

[形容詞型: ~クナイ]

チガウの動詞型タ形にウ音便形(チゴータ)およびその短呼形(チゴタ)があるが、これらは若年層ではあまり使われず、チガウカッタ、チャウカッタなどの形容詞型タ形の方が一般的である。同様にチガウの動詞型テ形ウ音便形(チゴータ)・ウ音便短呼形(チゴテ)も、若年層にはあまり使用されない。しかし、タ形のチガウカッタ・チャウカッタに比べると、テ形のチガウクテ・チャウクテは新しい形式であり、まだ広く使用されているとはいえない。同様に否定形のチガウクナイも、中年層や高年層では用いられない新しい形式である。現在、各活用形を形容詞型に統一しようとする動きが進行しつつあるといえる。

ところで、チガウの否定形は、〈否定〉の意味を担うものとしては実際にはあまり用いられない。これは、チガウで表される事態を否定するには、多くの場合、対義語であるオナジ(オンナシ)を用いることで足りるためであろう。

しかし、否定形がまったく使用されないというわけではない。形容詞型否定形のチガウコトナイ、チガウクナイなどは若年層の間でよく用いられている。ただしそれは〈否定〉の意味を担うものとしてではなく、〈同意要求〉という別の意味に特化されたものとしてであって、といかけの形で使用される。

(20) 全然志望校チガウクナイ?お前ら。(2007年採集・男子高校生同士の会話)
この発話は、[お前らの志望校が違う_{コト}]を否定し、さらにその否定命題の真偽を聞き手に問いかけているのではない。[お前らの志望校が違う_{コト}]が真であるという話し手の判断を示し、その判断の妥当性を聞き手に問うているのである³。形容詞型の否定形は主としてこの用法に使用されることが多い。

4. 1. 語彙としてのチガウとの相違点

否定の表現である(ト)チガウと前節でみた語彙としてのチガウとの違いは、構文

的なものである。〈否定〉の(ト)チガウは名詞やナ形容詞語幹に直接接続し、格助詞やとりたて助詞をはさむことはできない。

(21)このいちごは色がチガウ。 [語彙・違う]

(22)木いちごと野いちごはチガウ。 [語彙・違う]

(23)このいちごは大きさもチガウ。 [語彙・違う]

(24)このいちごは他のいちごとはチガウ。 [語彙・違う]

c f1. このいちごは他のいちごとチガウ。

c f2. *このいちごは他のいちご {ヤナイ/ジャナイ}。

(25)本当は、いちごは果物(ト)チガウ。 〈否定〉

c f. 本当は、いちごは果物 {ヤナイ/ジャナイ}。

(21)～(24)は語彙としてのチガウの例、(25)は〈否定〉としてのチガウの例である。(24)は取り立て助詞の「は」がなければ〈否定〉と同形になるが、チガウの意味するところはあくまでも「異なる」という語彙的なものである。これは、(25)がヤナイ、ジャナイなど他の否定形式に置き換えられるのに対して(24)が置き換えられないことから明らかである。

(ト)チガウは名詞・ナ形容詞述語の否定形式であり、イ形容詞や動詞に用いることはできない。イ形容詞は否定辞ナイおよびコトナイという分析的な形によって、動詞は否定辞ン・ヘンによって否定形が作られる。

(26)あれは花(ト)チガウ。 [名詞]

(27)あんまりにぎやか(ト)チガウ。 [ナ形容詞]

(28)*今日はあんまり暑い(ト)チガウ。 [イ形容詞]

c f. アツクナイ、アツーナイ、アツナイ、アツイコトナイ

(29)*あの人はいちごを食べる(ト)チガウ。 [動詞]

c f. タベン、タベヘン

4. 2. (ト)チガウの語形変化

(ト)チガウの活用のしかたは、語彙としてのチガウに準じるものである。

(30)いちごは {果物(ト)チガイマス/果物(ト)チャイマス}。 [丁寧形]

(31) a. 調べたら、いちごは果物(ト)チガウ。 [動詞型・タ形]

b. 調べたら、いちごは果物(ト)チガウ。 [形容詞型・タ形]

ただしテ形の場合、トの脱落した形(いわゆるト抜け)と比べ、ト抜けでない形(トチガウ)は語彙としてのチガウと混同されやすい。

(32) 調べたら、いちごは果物(ト)チガッテ野菜だった。 [動詞型・テ形]

(33) 調べたら、いちごはみかんとチガッテ野菜だった。 [語彙・違う]

また、(ト)チガウの否定形による二重否定表現は用いられにくい。

(34) a. ??いちごは 果物(ト)チガワシ / 果物(ト)チガワヘシ。

[動詞型・否定形]

b. ??いちごは 果物(ト)チガウコトナイ / 果物(ト)チガウクナイ。

[形容詞型・否定形]

c f. いちごは果物じゃなくない (=果物だ)。

ただし、といかけの形であれば、～コトナイ(カ)、～クナイ(カ)といった形容詞型否定形が使用される。

(35) いちごって、果物(ト)チガウコトナイ / 果物(ト)チガウクナイ ?

[形容詞型・否定形]

しかし(35)は、「否定命題 [いちごは果物ではない] は真ではない」の真偽を尋ねているのではない。(35)で表されるのは「[いちごは果物ではない] と思うかどうか」ということであり、二重否定から導かれるはずの「否定命題の否定」という意味は失われている。これは、§4で述べたチガウの否定疑問形と同じく、～コトナイ(カ)や～クナイ(カ)が文末形式として固有の用法を持っているためである。したがって、否定形式(ト)チガウの否定形によって「否定命題の否定」を表すことは一般的ではないといえることができる。

5. 否定疑問形式(ト)チガウ(カ)

5. 1. (ト)チガウ(カ)の用法

否定疑問形は述語の否定形式に疑問の終助詞カを伴って形作られるが、実際の話しことばの中では、カが脱落し、代わって上昇イントネーションのみで問かけが示されることも多い。否定疑問形式を用いた文には、①命題否定疑問文、②話し手の感情を表す疑問文、③話し手の認識を表す疑問文、などがある。基本的には、名詞やナ形容詞述語文であればいずれにも(ト)チガウ(カ)を用いることができる。

89 (36) いちごは本当に果物(ト)チガウ(シ)(カ)? [①命題否定疑問]

(37) さっき頼んだデータの入力作業、大変(ト)チガウ(カ)? 時間かかりそうなら
 応援頼むけど。 [②感情]

(38) この作業、意外に大変(ト)チガウ(カ)? 明日までには無理かもなあ。

(36) は、[いちごが果物ではない_{コト}]という否定命題についての真偽を聞き手に問いかける命題否定疑問文の例である。この場合、否定命題の真偽が問題になっていることをより明示的にするため、(ト)チガウ_ン(カ)のように「のだ」の「の」にあたる_ン(ノ・ノン)を挿入することが多い。(37)は命題成立に対する話し手の感情を表す否定疑問文の例で、命題成立を好ましくないと考えていることが否定疑問形式によって示されている。一方(38)は、命題成立の見込みがあるという話し手の認識を表す否定疑問文で、話し手の認識を提示して聞き手の意見表明を求めている。このような場合に(ト)チガウ(カ)を用いても非文ではないが、ジャンイ(カ)、コトナイ(カ)といったほかの否定疑問形式によって表されることの方が多いようである。これは、上記のような場合に(ト)チガウ(カ)を用いると〈推測〉の意味に取られやすいためである。(ト)チガウ(カ)と(ト)チャウ(カ)を比べると、とくに(ト)チャウ(カ)にその傾向が強い。このことは、(ト)チガウ(カ)が〈推測〉の形式としてかなり固定化した文末表現となっていることを示している (§ 6 参照)。

5. 2. (ト)チガウ(カ)の語形変化

否定疑問形式としての(ト)チガウ(カ)には過去形があり、非過去形との間にテンスの対立がある。

(39) 当時の基準では、いちごは 果物(ト)チガッタ(ン)(カ) / 果物(ト)チガウカッタ(ン)(カ) ? [①命題否定疑問]

(40) データの入力作業、大変(ト)チガッタ(カ) / 大変(ト)チガウカッタ(カ) ? [②感情]

(41) あの作業、意外に 大変(ト)チガッタ(カ) / 大変(ト)チガウカッタ(カ) ? [③認識]

ちなみに、後述するように〈推測〉の用法には過去形がないため、(39)～(41)が〈推測〉と混同されることはない。

否定疑問形式(ト)チガウ(カ)には、丁寧形もある。

(42) a. いちごは本当に果物(ト)チガイマス(ノン)(カ) ? [①命題否定疑問]

b. いちごは本当に果物(ト)チガウンデス(カ) ?

(43) さっき頼んだデータの入力作業、大変(ト)チガイマス(カ) ? 時間かかりそうなら応援頼みますけど。 [②感情]

(44) この作業、意外に大変(ト)チガイマス(カ) ? 明日までには無理かもしれません

んねえ。

[③認識]

命題否定疑問文で「のだ」相当の助詞が生起する場合、(42) a のように丁寧形(マス)の後に「のだ」相当の助詞を続けるほかに、(42) b のように丁寧形(デス)の前に「のだ」相当の助詞が来ることも多い。

6. 〈推測〉のン(ト)チガウ(カ)

6. 1. ン(ト)チガウ(カ)の用法

〈推測〉とは、命題についての複数の可能性のうち、命題が成立するという可能性を選択し聞き手に示す、というものである。〈推測〉は、自身が選択した可能性を提示することで相手への情報提供となる場合もあれば(例文(45))、選択した可能性の提示によって話し手の判断の妥当性を聞き手に問う、すなわち情報を要求する発話となる場合もある(例文(46))。

(45)子：ここにあったドーナツ食べたの、だれ？

母：さあ。お父さん(ト)チガウ(カ)? [情報提供]

(46)子：もしかして、私のドーナツ食べたのお父さん(ト)チガウ(カ)？

父：あ、ごめんごめん。あれ、お前のだったのか。 [情報要求]

両者は、複数の可能性の中から命題成立の可能性を選択しそれを提示する、という点では共通しているし、実際の発話の中では、情報を要求しているのか、単に話し手の推測を提示しているのか判断しかねる例も少なくない。

(47) A：パンキョー [= 一般教養] の単位は三つ [取った] かな。

B：{笑} パンキョー ばかりチャウ 稼いでんノチャウ。

A：英語 フラ語 [= フランス語]、しかもフラ語 サイリ [= 再履修] {笑}

(1997年収録、20代男性同士の会話)

(48) [カウンセラーの資格が取れる講座に進学するか迷っているBに対して]

A：でも これから どんどん あれチャウ カウンセラーとか必要ん [= にな] ってくるンチャウ、(B：うん、そうやなー。) いじめ問題とか あれも どこまで解決できるんか (B：うん。) わかれへんけどなー。(B：どうなんやろ。)

(1997年収録、20代女性同士の会話)

(47) (48) とともに、話題の内容は相手に関することであり、情報量は話し手よりも聞き手の方が多くは必ずである。したがって、ここで使われているン(ト)チガウ(カ)を、話し手の推測を提示しつつ相手からの情報を要求している、とするのは妥

当な考え方である。しかし、(47)でAはBに対して明確な応答をしていないことから、BがAについての考えを述べたにすぎないと解釈することも可能である。同様に(48)では、Aの発言に対してBは「うん、そうやなー」と返答しているが、情報を要求するAに対する応答というよりは、提供された情報に対する同意表明とみるべき発話のようにも思われるのである。

6. 2. ン(ト)チガウ(カ)の語形変化

語形変化についていうと、〈推測〉としてのン(ト)チガウ(カ)には、丁寧形はあるが否定形やテ形はない。

(49)もしかしてこの写真、原田先生(ト)チガイマス(カ)? [丁寧形]

また、形の上ではタ形が存在するが、〈想起〉という別の文法的意味を表す形であり、〈推測〉のン(ト)チガウ(カ)との間にテンスの対立があるわけではない。

(50)明日、卒業式で紅白饅頭もらうン(ト)チガウ(カ)? 〈推測〉

(51)きのう、卒業式で紅白饅頭もらったン(ト)チガウ(カ)? 〈推測〉

(52)明日、卒業式で紅白饅頭 もらうン(ト)チガッタ(カ) / もらうン(ト)チガウカッタ(カ)? 〈想起〉

7. 新しい文末形式ンチャンの用法

近年、若年層を中心によく使用されている形式にンチャンというものがある。これは、ン(ト)チャウ(カ)の一番短い形式であるンチャウの語末に「のだ」の「の」にあたるンが付加され、さらにンチャウン→ンチャンと約まったものである。

(53)もしかして、私のドーナツ食べたのお父さんチャン。

(54)ここに置いたら邪魔ナンチャン。

(55)これ、ピンクのリボンつけたらかわいいンチャン。

(56)あした、卒業式で紅白饅頭もらうンチャン。

ンチャンは、つねに下降のイントネーションをとる。否定疑問形式に由来するものではあるが、ンチャンには問いかけの意味が含まれていない。

ンチャンの用法は、ン(ト)チガウ(カ)と同じく〈推測〉であり、上例(53)～(56)はそれぞれン(ト)チガウ(カ)に置き換えることが可能である。しかし、ン(ト)チガウ(カ)が聞き手からの情報提供を要求する場合にも用いられるのに対して、ンチャンにはそのような用法はなく、話し手の考えを提示する場合にしか用いられな

い。

(57)母：お兄ちゃん、今日は**ずいぶん**帰りが遅いね。

子：友達と飲みに行ってる**ンチャン**。

母：そうかもしれないね。電話してくれば**いいの**に。

(58)A：あれっ、ここに**あった**ドーナツがない。

B：知らないよ。自分で**食べた**ンチャン。

話しことばの場合、「問い→答え」のような隣接対が必ずしも隣り合って出現するとは限らないし、ンチャンを用いた発話の後に聞き手からも情報が提供されることがないとはいえない。しかし、ンチャンと**ン(ト)チガウ(カ)**とでは、話し手の意図するところに明確な相違がある。すなわち、**下降のイントネーション**で実現されるンチャンにはすでに**問いかけの要素**はなく、話し手の判断の**妥当性**を聞き手に問うという意味はンチャンからは**出てこない**のである。

(59)A：夏休みは**バイト**が**がんばった**よ。

B 1：かなり**稼いだ**ン(ト)チガウ(カ)？

B 2：かなり**稼いだ**ンチャン。

(59) B 1の場合、「**稼いだ**ン(ト)チガウ(カ)？」と言え、話し手自身の判断の妥当性を聞き手に求めるという発話意図が現れる。それに対して「**稼いだ**ンチャン」では、「**複数の可能性のうち命題成立の可能性**を選択した」という話し手の判断が提示されるのみで、聞き手からの情報を要求するという発話意図は生まれない。ンチャンは、単なる**ン(ト)チャウン**の縮約形ではなく、**〈推測〉**の中でも情報提供に特化された**文末形式**といえる。

(ト)チガウ(カ)とンチャンの関係はちょうど、**名詞・ナ形容詞述語の否定疑問形式**や**ナイカ**とそれを出自とする**ヤン(カ)**のそれと類似している。ヤナイカには**複数の用法**があるが、ヤン(カ)はその一部に特化した**文末形式**である。同じように、ンチャンは、**ン(ト)チガウ(カ)**が持つ**複数の用法**のうちの「**話し手の推測の提示**」だけを表す**文末形式**となっているのである。

8. 活用形の種類と形式の固定化

ここまで、動詞チガウに由来する諸形式について、それぞれの形態的特徴と用法を整理してきた。活用形の種類に注目してまとめると次頁の表3のようになる。表3から、**語彙**としてのチガウ > (否定) としての(ト)チガウ > **否定疑問形式**の(ト)

チガウ(カ) > 〈推測〉のン(ト)チガウ(カ) > 〈推測提示〉のンチャンの順に活用形が減少し、形式の固定化が進んでいることがわかる。動詞チガウの接辞化という変化の流れが見てとれるのである。

〔表3 チガウの用法と活用の種類〕

	語彙 チガウ	〈否定〉 (ト)チガウ	否定疑問 ⁶ (ト)チガウ(カ)	〈推測〉 ン(ト)チガウ(カ)	〈推測提示〉 ンチャン
丁寧形	○	○	○	○	—
タ形	○	○	○	▲	—
テ形	○	○	—	—	—
否定形	○	▲	—	—	—

凡例：○当該形式あり、▲形式はあるが用法が異なる、—当該形式なし

本稿では、チガウとチャウ、トチガウとチガウ（ト抜け）、ントチガウカとンチガウ（ト抜け・カなし）などを基本的に自由変異として扱ったが、もしかするとこれらの間にも用法ごとの使用の偏りが存在するかもしれない。談話データからそれらを詳細に分析することで、接辞化の流れをいっそう明確にできる可能性がある。

9. まとめと今後の課題

本稿では、大阪方言における動詞チガウに由来する諸形式について、形態的特徴と文法的意味の整理を試みた。本稿で指摘したことは次のようにまとめられる。

- (a) 本来は動詞型の活用をするチガウに形容詞型の活用がある。縮約形であるチャウは基本的に形容詞型の活用をし、丁寧形（チャイマス）のほかには動詞型の活用を持たない
- (b) 語彙としてのチガウ > 〈否定〉としての(ト)チガウ > 否定疑問形式の(ト)チガウ(カ) > 〈推測〉のン(ト)チガウ(カ) > 〈推測提示〉のンチャン、の順に活用形が減少し、形式の固定化がすすむ
- (c) 〈推測〉の用法のうち、聞き手からの情報提供を要求しない表現に特化したモダリティ形式としてンチャンという形が成立している

ただし今回の記述は主に筆者の内省に基づくものであり、実際の使用についての詳細な分析を行うことができなかった。たがいに置き換えることのできるバリエーションに使用の偏りがどうか、談話資料を用いて検証し、チガウの接辞化という

変化の流れをより明確に描き出すことが期待される。また、他方言との対照として、ンチャンのように〈推測の提示〉を担う専用形式が他方言にもあるかどうか気になるところである。たとえば東京方言のジャンは、ンジャンという形で〈推測の提示〉の用法を担うことが松丸（2001）によって指摘されている。従来の研究で他形式との自由変異とされてきたものに、こうした形式が含まれている可能性もあるだろう。今後の、追究すべき課題としたい。

引用文献

- 鈴木昌博（1995）「大阪府大阪市都心部方言の否定の表現」方言研究ゼミナール幹事会編『方言資料叢刊』第5巻（日本語方言の否定の表現）
- 郡史郎（1997）「大阪方言の特色」平山輝男編『日本のことばシリーズ27 大阪府のことば』明治書院
- 高木千恵（2000）「大阪方言におけるテ形について—形容詞・名詞述語・動詞否定形式のテ形（相当）形式—」『阪大社会言語学研究ノート』第2号 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- （2005）「大阪方言の述語否定形式と否定疑問文—「～コトナイ」を中心に—」『阪大社会言語学研究ノート』第7号 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室
- （2006）『関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相』（『阪大日本語研究』別冊2号）大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- （2007）「関西若年層の用いる同意要求表現・クナイ（カ）について」『日本語学会2007年度秋季大会予稿集』
- 前川朱里（2000）「「（ヤ）ガナ」と「ヤンカ」の用法・機能上の相違について—「ではないか」との対比を中心に—」『現代日本語研究』第7号 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座
- 松丸真大（2001）「東京方言のジャンについて」『阪大社会言語学研究ノート』第3号 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

- 1 同様のことは動詞否定形を作る否定辞の語形変化にも認められる（高木2006）。
- 2 あるいは、「違いがない」というような表現がなされる。
- 3 これには、コトナイ（カ）、クナイ（カ）といった否定形を出自とする形式の文末

形式化という別の問題が関わっている。詳しくは高木（2005）および高木（2007）を参照されたい。

- 4 逆に、ヤン(カ)に固有の用法もある（前川2000）。
- 5 否定疑問形式には①命題否定成立の問いかけ、②話し手の感情を込めた問いかけ、③話し手の認識提示、といった用法があるが（§ 5 参照）、ここでは「否定疑問形式」として一括した。

（たかぎ ちえ／本学専任講師）